TSUNAGU

［繋ぐ］

Vol.38
2019 WINTER

愛でる Special Issue:

時代と生きる伝統工芸「伊勢型紙」

深める＋ FUKAMERU PLUS
訪問看護の未来を支える「ホウカンTOKYO ビジネスサービス」

先どる
段ボールに新たな価値を吹き込む島津冬樹さんの「段ボール財布」

01

引彫職人

伊藤　肇さん

60年にわたって
自分だけの線を刻む

[上]傾斜のついた"当て場"と呼ばれる机で行う彫り作業は、1日10時間を超えることもある。[中]型を墨で写し取るための刷毛。[下]さらなる技術向上のために、伊藤さんは仕事の合間に自らデッサンした図柄を彫るという。

機械では表現できない
ぬくもりのある線を彫り続ける。

伊勢型紙の発祥地である三重県鈴鹿市白子（しろこ）地区で生まれ育った伊藤肇さんは、型地紙（かたじがみ）と呼ばれる和紙を加工した紙に着物などの柄となる文様や図柄を小刀（彫刻刀）で彫る職人です。

「かつては300人おった職人も、今では20人ほど。実際に毎日仕事している人はもっと少ないし、そのほとんどが60代以上だね」。伊藤さんが職人の世界に飛び込んだのは15才のとき。同じ職人をしていた父親に弟子入りし、現在に至るまでの60年にわたって、その技を磨き続けてきました。「若い頃は、朝8時半から深夜0時まで。当時は徹夜することも多かったね。着物や風呂敷、夜具（寝具）やネクタイなんかの注文もあったけど、今は写真型（シルクスクリーン印刷）があるから、だいぶ仕事は減りました」。

自ら加工した小刀を用い、研ぎ澄まされた指先の感覚を頼りに細かい装飾を施していく彫り職人の手仕事。その技術を次の世代に継承していく必要性について尋ねると、「自分の技術は、死んだら終わりでいい」と伊藤さんは言います。「基礎を教えることはできるけど、細かい感覚は伝えようがない。技術って、親方の仕事やできあがった型紙を見て、ひたすら考え、練習を重ねる中でようやく身につくものだから」。

伊勢型紙の彫刻技法には、引彫り（縞彫り）、突彫り、道具彫り、錐彫りの4つがあり、職人は得意な1つ、もしくは2つの専門を決めて、その技を極めていくそうです。「昔は突彫りだったけど、今は引彫りをしています。職人それぞれに個性があるけど、私が大切にしているのは、一つひとつの線に〝やわらかさ〟を持たせること。もちろん柄はきちんと彫るんだけど、あえて少しの〝ゆらぎ〟を加えることで、ぬくもりが生まれる。柄が生きるか死ぬか、そこには機械では表現できない、手彫りならではの良さがあるんです」。

「自分ではそんなに大した技術だとは思わん」という伊藤さん。その謙虚で誠実な手仕事が、これからも味わいと潤いのある多様な美を生み続けます。

時代と生きる伝統工芸
「伊勢型紙」

布地を染色するための型紙として、千有余年といわれる歴史を紡いできた「伊勢型紙」。卓越した技術を持つ職人によって丹念に刻まれた精微な文様は日本の美を伝える伝統工芸品として世界的に高く評価される一方、現代の和装離れと印刷技術の進歩によって、その需要は減り続けています。「伊勢型紙」発祥の地であり、ほぼすべてを生産する三重県鈴鹿市白子地区。そこには、地域の生活や風土と一体となって継承されてきた地域文化を思い、新たな価値創出の可能性を模索する3人の担い手がいました。

TSUNAGU

TSUNAGU 2019 Winter

愛でる …… P01
時代と生きる伝統工芸
「伊勢型紙」

深める＋ …… P08
訪問看護の未来を支える
「ホウカンTOKYOビジネスサービス」

深める …… P09
KPPの最新ニュースを
キャッチアップ

先どる …… P11
段ボールに新たな価値を吹き込む
島津冬樹さんの「段ボール財布」

伝える …… P13
恩顧の思い出がよみがえる
文筆家から届いた礼状

訪ねる …… P15
紙の魅力を体感できる
「ペーパーイベント・カレンダー」

作る …… 付録
オシャレで実用的な
「12面体ダイスカレンダー」

02

「テラコヤ伊勢型紙」

木村 淳史さん

故郷への思いを胸に
新たな伝統づくりに挑む

「テラコヤ伊勢型紙」の木造家屋は、かつてオモチャ屋だった古民家。空き家の有効利用を提案する地域の仲間とともにリノベーションした。

テキスタイルクリエイターが集い、利益を出せるまちにしたい。

格子戸のある古い町屋の家屋が連なり、情緒ある街並みが残る白子（しろこ）地区。その一角に、ひときわ歴史を感じさせる一軒の古民家があります。

「テラコヤ伊勢型紙」は、型紙づくりの若い職人、木村淳史さんが２０１７年５月に開業した、職人修行を体験できるゲストハウスです。４泊５日（通いは６日間）で３種類の課題に挑み、伊勢型紙の基礎を学ぶ［弟子入りコース］のほか、オリジナルの浴衣、手ぬぐい、生地を制作する「オリジナル制作コース」、用意された図案を１日で彫る［１日体感コース］という３つがあり、オープンから１年半にもかかわらず、すでに１５０名ほどが参加。その９割を女性が占め、約半数が期間の長い「弟子入りコース」を選択するそうです。

「このテラコヤをはじめた目的の一つは、〝副業弟子〟を育成することです。平日は今の仕事を続けながら、週末だけ伊勢型紙の仕事をしてもらう。そうすることで経済的なリスクを分散できるし、本業で得た知識や感性を伊勢型紙に融合させることで、新しい価値を創造することができるんじゃないかと思っています」。木村さんは型紙職人としての活動と並行して、映像やウェブの制作も手がけるなど、マルチな活動を展開。副業が本業にも効果を生む新しい働き方を自ら実践しています。

白子で生まれ育った木村さんは、大学進学を機に上京。卒業後に就職したアパレル企業を退職し故郷に戻った木村さんは、まちの風景に大きな変化を感じたそうです。「子どもの時は、型紙の職人さんが窓辺で作業している風景があたり前にありました。かつては千人ほどいた職人さんも、今やそのほとんどが高齢化などを理由に廃業され、当時の面影はありません。僕は、あの頃の白子の風景が好きだったし、どうにか取り戻すことはできないかと思ったんです。地元に戻って伊勢型紙を使った新商品やサービスの開発をしたいと思っていたのですが、お願いできる職人さん自体が少ない。だったら自分で育てようとはじめたのが、このテラコヤなんです」。木村さんは、「もともと職人になるつもりはなかった」にもかかわらず、その苦労を知るために職人をしていた祖父と親交のあった伊藤肇さん（P02）に弟子入り。２年間の修行と並行して、クラウドファンディングで資金を集めて古民家をリフォームしたのち、職人さんが実際に使っていた道具を譲り受け、このテラコヤを開業しました。

木村さんが未来に見据えるのは、白子を「テキスタイルクリエイターが集うまち」にすること。「その一歩として、誰もが自由に使える服飾のコワーキングスペースをオープンしました。今後、染め工房を構えることで試作品づくりと伊勢型紙を使った新商品の開発を行い、実際に販売するのが今の目標です。服飾のデザイナーやバタンナー、染め職人が自然と集まり、伊勢型紙の職人とのコラボによって新しい発想が生まれる。そのうえで、まち全体で利益を生み出せるサイクルを確立したいと思っています」。

気さくな人柄と語り口で参加者をもてなす木村さん。クリエイターならではのアドバイスができるのも好評の理由。

テラコヤ伊勢型紙

三重県鈴鹿市白子1-10-6

HP：http://terakoya-kataya.com

問い合わせ：terakoya.kataya@gmail.com

①弟子入りコース参加者の様子。　②窓辺で型紙を彫る木村さん。幼少期、通りからあたりまえに見られたこの光景を取り戻したいと木村さんは話す。　③彫刻した型紙を手ぬぐいなどに染めてくれるオプションもある。　④小刀などの道具類は、職人が実際に使用していたもの。　⑤師匠の伊藤さんはもともと祖父との親交があり、木村さんとも旧知の関係。　⑥木村さんが11月にオープンした服飾のコワーキングスペース。ミシンなど必要な機材も完備されている。

03

「オコシ型紙商店」

起　正明さん

型紙の意匠を転用した
オリジナル商品を開発

数多くのオリジナル商品が陳列されたギャラリー。壁面には伊勢型紙の意匠を凝らした美しい装飾が目を引く。

時代に必要なものをつくり、型紙の伝統をつなげていきたい。

1924年に創業したオコシ型紙商店は、94年の歴史を誇る型商です。型商とは、代理店と問屋の機能を兼ね備えたもので、絵師に依頼した図案、材料となる型地紙を彫り師に渡し、型に仕上がった伊勢型紙を染元に販売するまでを担います。同社は、自社で商品企画と図柄のデザイン、製造、販売までを手がける型商として、時代の流行を反映した伊勢型紙を生み出しています。「伊勢型紙は着物を染めるための用具ですが、洋服の一般化によってその需要は減り続けています。日本の伝統である着物文化を支えてきた伊勢型紙を後世に伝えていくために、その意匠性を活かした商品開発を続けています」。

そう話す起正明（おこし まさあき）さんは、創業者である祖父、多様な文様を考案した父から伝統継承を託された三代目。彫刻することでしか表現できない伊勢型紙の文様・意匠を生かしたオリジナル商品は、光源を組み合わせることで生まれる陰影を活かした照明器具や装飾パネルといった室内インテリアから、スマホケースや桐箱、ポストカードなどの生活雑貨まで、多種多様なラインナップが揃います。「〝デザインは生活を楽しくする〟をコンセプトに、生活に寄り添う商品の開発を進めています。着物は生活に必要なものだったからこそ需要があったわけですし、今の暮らしに必要とされる物を提供していきたいと思っています」。起さんは、それらの商品をフランス・パリで開催されたインテリア見本市「メゾン・エ・オブジェ」にも出展。日本の伝統美に注目する、感度の高い国際マーケットを視野に新たなファン拡大をめざしています。

和のデザインの原点ともいえる伊勢型紙の意匠は、建築やアパレル業界からも大きな注目を集めています。オコシ型紙商店の2階にある大広間には1万点を超える型紙のストックがあり、打ち合わせに訪れた客人は、実際の型紙を見ながら利用目的や趣向に合った型紙を選ぶことができます。その中には、先々代、先代がコレクションとして集め続けた、歴史的に貴重な伊勢型紙も数多く含まれています。

「古くは江戸時代のものから現代のものまで。遠目には無地に見えるけど、近くで見ると繊細な加工が施されている〝裏勝り（うらがまさり）〟の精神が息づく古典的なものから、日本の花鳥風月を表現した風流なもの、動物や絵文字などを文様にした変わり種まで、伊勢型紙には当時の世相を反映したもの、自由な発想から生まれたデザインがたくさんあります」と起さん。「当時の着物は、ファッションそのもの」という起さんの言葉どおり、伊勢型紙は日本人の美意識を知ることのできる、ファッションの系譜であることがうかがい知れます。

伊勢型紙の伝統を未来へ継承するために、起さんは時代に合わせて変化し続けることが重要だと言います。「今の時代に必要とされるものは何かを考える。かたちや手法を変えてでも、続けていく、つなげていくことが大切だと思っています。伝統は、一度途切れたら終わりですから」。人々の価値観が目まぐるしく変化する時代において、オコシ型紙商店はさらなる挑戦に取り組んでいます。

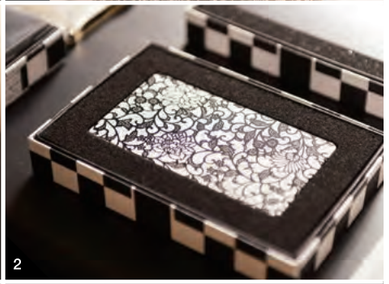
長年にわたって古今の伊勢型紙に触れてきた起さんは、審美眼を備えた"目利き"として最適な型紙を提案する。

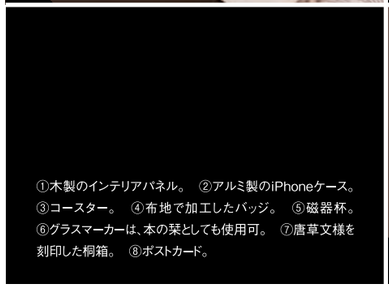
オコシ型紙商店

三重県鈴鹿市江島本町 27-25

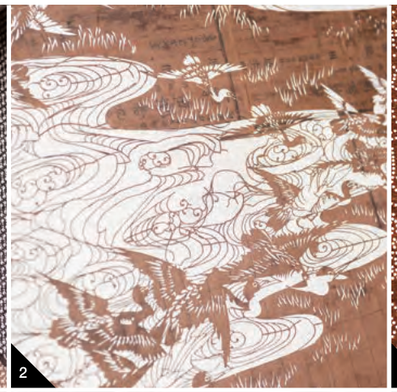
TEL：059-386-0229

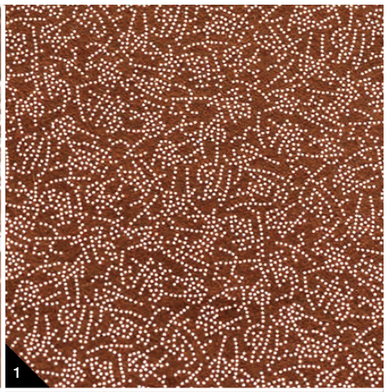
HP：https://okoshi-katagami.com





①木製のインテリアパネル。 ②アルミ製のiPhoneケース。
③コースター。 ④布地で加工したバッジ。 ⑤磁器杯。
⑥グラスマーカーは、本の栞としても使用可。 ⑦唐草文様を刻印した桐箱。 ⑧ポストカード。





①錐彫りの型紙。"七福神"の文字が文様になっている。
②台帳の和紙を再利用してつくられた江戸時代の型紙。
③先々代、先代が集めた型紙は、1万柄を超える。 ④反物とそれを染めるために使用された型紙。 ⑤竹の中に多様な文様をコラージュした珍しい型紙。

KPPのグループ企業にクローズアップ

深める＋ FUKAMERU PLUS

スタッフの皆さんとホウカンのメンバーともに頑張っています

ホウカンTOKYOビジネスサービス株式会社

東京都中央区明石町6番24号
TEL:03-4431-7235
https://www.htbs.co.jp/

ホウカンTOKYOビジネスサービス株式会社は、訪問看護ステーションの運営事業者の支援を目的として2017年3月に発足した、KPPのグループ企業です。**「なぜ紙の商社が医療福祉分野に？という質問をよく受けますが、社会課題の解決に向けて、私たちが培ってきたビジネスの知見を活かせる方法はないか。その答えとしてたどり着いたのが、訪問看護の支援だったんです」**と同社・竹本純一郎取締役。2025年には、団塊の世代にあたるすべての人が75歳以上の後期高齢者となるため、高齢者の医療・介護の需要がさらに増えるのは必至です。また、自宅でのケアを必要とする高齢者を地域で効率よくサポートするために、国は「地域包括ケアシステム」の構築を推進するなど、訪問看護のニーズは今後さらに増えることは間違いありません。**「その反面、訪問看護事業者数は増えてはいるが、廃止・休止も多いのが実状です。在宅医療・介護の利用促進に貢献することを使命として、このホウカンTOKYOを立ち上げました」。**

訪問看護事業者が抱える課題と具体的な施策について竹本取締役に尋ねると、**「ひとつは、訪問看護利用者数の拡大。そのために医療機関やケアマネジャーなど、地域の医療・介護に携わる方々のネットワークを活かした営業活動を続けています。足を使って一軒ずつ訪問する地道な活動ですが、ネットワークの広がりとともに着実に実を結びつつあります。もうひとつの課題は、現場で働かれる看護師の採用です。地域の実状に沿った求人活動はもちろんですが、経営者の採用方針や看護師の方の専門性や経験、双方の仕事に対する考え方まで幅広く視野に入れたマッチングサービスを行うことを大切にしています」**とのこと。また、採用後の定着率を高めるために**「看護師の方が利用者さまへのケアに集中する時間を確保することが重要」**と竹本取締役は話します。**「看護師は、ケア業務を行ったのち、利用者さまの症状や状態を報告書にまとめて主治医に提出する必要があります。そのほかにも、ケアマネジャーや関係者への状況報告、医療請求書の作成など事務業務や手続きなどの負担が大きく、利用者さまのケアにあてる時間が削られてしまっているのが実状です。そうした業務管理や運用などを私たちが支援することで、看護師の方々の業務負担を軽減、安心して継続的に働いていただけるためのサポートを行っています」。**

また同社では、設立当初から月1回のペースで、ケアマネジャー向けの「在宅医療研究会」を開催。認知症、パーキンソン病、高血圧、糖尿病など、在宅医療・介護に関連する専門テーマを取り上げ、ケアマネジャーの知識習得を支援しています。**「利用者さまが住み慣れた地域で自分らしい生活を続けていくために、在宅医療・介護を支援していきたい」**と話す竹本取締役。日本社会の未来を見据えた挑戦は、今後さらに加速していきそうです。

■ホウカンTOKYOは東京都下を中心に6つの拠点を展開しています

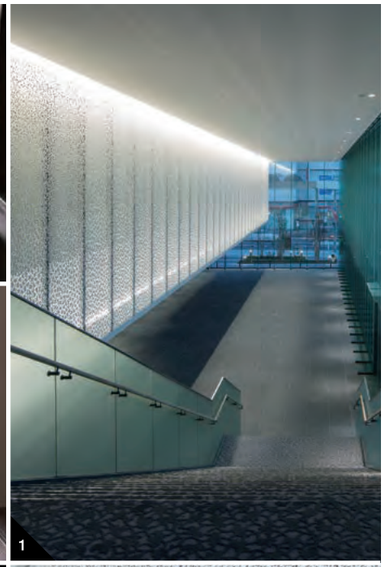
三軒茶屋　上池台　不動前　代々木上原　立川支所　練馬　江東※

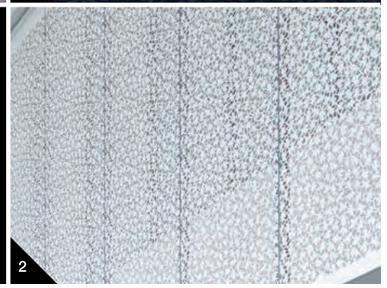
※2019年オープン予定

[上]毎月開催される在宅医療研究会の様子。[右下]竹本純一郎取締役。[左下]三軒茶屋ステーションでの打ち合わせ風景。

型紙の文様美を支える「型地紙」とは?

伊勢型紙の特徴の一つが、彫刻を施すためにつくられる型地紙。薄く漉いた数枚の美濃和紙を柿渋で貼り合わせたもので、天日乾燥と松や杉などで燻す「室枯(むろが)らし」と呼ばれる工程を繰り返すことで、厚みにムラの少ない、型紙に適した材料となる。室(燻製室)から取り出した型地紙は、数ヵ月から1年ほど湿度の低い場所で寝かされることで、伸縮が少ない安定した規格に仕上がる。





①②百五銀行丸之内本部棟のエントランスに設置された壁面装飾。オコシ型紙商店が図案の作成・型紙彫刻・デジタルデータ化を担当。　③④伊勢型紙の文様を取り入れた、ステンドガラスのハンドバッグと飾り皿(オコシ型紙商店所有)。

伝統文化の継承に必要なのは、時代の変化に即した革新の連続。

伊勢型紙は、国の重要無形文化財の指定を受ける、三重県鈴鹿市の伝統産業です。その起源には諸説あるものの、室町時代末期にはすでに型紙によって着物が染められていたといわれています。江戸時代になると、武士の裃(かみしも)や小紋が流行し、より精微で美しい文様を表現するために、伊勢型紙の彫りの技術は大きく発展。徳川御三家の一つである紀州藩の庇護を受け、全国規模の販売網を持つ強力な専売体制によって飛躍を遂げ、着物文化の礎を築きました。

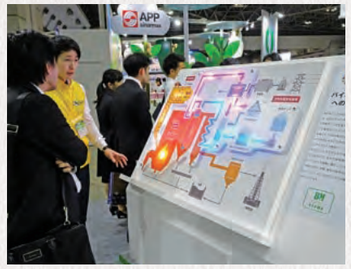
極限の集中と限りなき反復作業を通して、卓越した技術をより高めるための努力を続ける引彫職人の伊藤肇さん。故郷の原風景を取り戻すために、後継者育成と新たなビジネスモデルの確立をめざす「テラコヤ伊勢型紙」の木村淳史さん。日本伝統の美しい文様を反映したオリジナル商品の開発、デザイン販売を通して、文化継承を図る「オコシ型紙商店」の起正明さん。今回お話をうかがった3名は、視点やアプローチ方法に違いはあるものの、美への探究心と先人の経験と知恵に対する敬意、地域の伝統文化を愛する共通の思いがあります。ライフスタイルや価値観など時代の変化に即し、多様化するニーズに応えるために革新を続けること。地域文化を支える彼らの新しい発想は、効率化や合理性ばかりが要求される時代の荒波をも超えていくはずです。

「エコプロ2018」に出展しました

当社グループは2018年12月6日（木）～8日（土）の3日間、東京ビッグサイトにて開催された日本最大級の環境展示会「エコプロ2018」に出展しました。

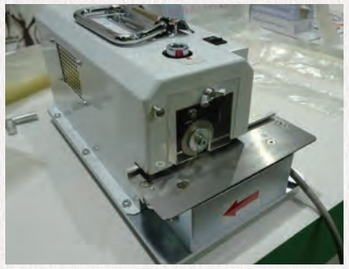
出展ブースでは、「木からはじまる環境の未来」をテーマに、ブース中央に配した「はじまりの木」を起点として、紙が作られ、回収され、再生される一連の流れを紹介。木からはじまるもうひとつの流れとして、バイオマス発電用燃料の供給についても展示し、総合循環型企業としてこれらの流れのすべてに関わる当社の事業の説明を行いました。また、安心・安全な薬包綴じ機「トジスト」の実演も同時に行いました。

ブース中央に「はじまりの木」を配置し、そこから紙が作られ、回収、再利用される過程を表現しました。



バイオマス燃料を発電所に供給する事業について、模型と映像を使って説明しました。

古紙回収リサイクルシステム「タウンecomo」の実機を展示しました。



薬包綴じ機「トジスト」のデモンストレーションは来場者の関心を集めました。

「統合報告書2018」を発行しました

当社の事業活動に関わる財務情報ならびに非財務情報を包括的にお伝えする「統合報告書2018」を発行しました。この報告書を通してステークホルダーとのコミュニケーションをさらに活性化し、みなさまの期待にお応えする企業をめざしていきたいと考えております。なお、統合報告書は当社ウェブサイトからもご覧いただけます。

■日本語版
www.kppc.co.jp/ja/ir/library/integrated.html

■英語版
www.kppc.co.jp/en/ir/report.html

東証一部上場記念イベントとして、「世界紙商会議」と「上場記念パーティ」を開催致しました

本誌36号でもご報告したとおり、当社は昨年6月26日に東京証券取引所第一部に上場致しました。それを記念するイベントを昨年11月27日に帝国ホテル東京（東京都千代田区）にて開催しました。

アメリカ、アジア、ヨーロッパなど海外からパネリストをお招きした「世界紙商会議」では、“超スマート社会における紙商の成長戦略”をテーマに、全国KPP会会員の皆さまに世界市場の現状とこれからについてご紹介致しました。また同ホテル「孔雀の間」で開催した「上場記念パーティ」には、取引先さまをはじめ約800名のご臨席を賜り、盛況を博しました。

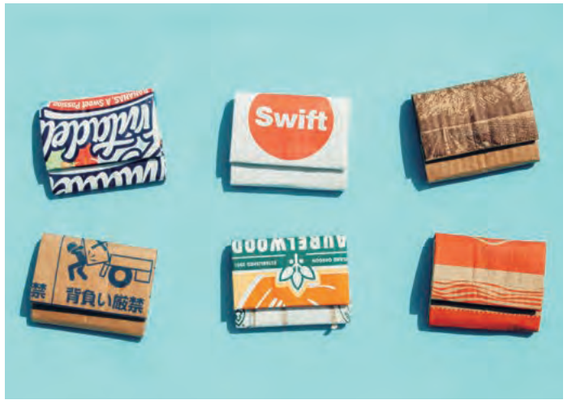
1924年の創業から94年の長きにわたり、多大なるご支援をいただいたみなさまに感謝しつつ、東証一部上場を次の成長期に向けた出発点と考え、今後のさらなる事業拡大をめざしてまいります。

■全国KPP会「世界紙商会議」

海外の紙商のパネリストと田辺社長が今後の成長戦略について意見が交わされました。

■「東証一部上場記念パーティー」

多くの皆さま方にご臨席いただきました。



主にアメリカ、ヨーロッパなどから集めた段ボールを使ってつくった財布。

段ボールに対する見方が変わる「ワークショップ」を国内外で開催

島津さんは、国内外のアートギャラリーはもちろんのこと、学校やショップ、ときには愛媛県の選果場でみかん農家の方を対象にしたワークショップも開催しています。また、ファッションブランドとコラボした野外ワークショップでは、店舗で不要になった靴箱を使ってかっこいい名刺ケースを制作。参加者の“すごい!”という驚きが活動の原動力となっています。

米国アーカンソー州ホットスプリングで開催したワークショップの様子。

新品の状態と2年間使用した状態を並べたもの。
段ボールの財布は、使い込まれた味のある風合いも魅力。

帆船がシンボルのウイスキー用段ボールからつくった作品。
自分の趣向に合う財布が持てるのも、多様な段ボールならでは。

MOVIE

島津さんの活動に迫るドキュメンタリー映画『旅するダンボール』が公開中!

不要なもの（ゴミ）から大切なもの（財布）を生み出す、段ボールアーティスト島津冬樹さん。彼の9年にわたる活動の集大成として制作されたドキュメンタリー映画『旅するダンボール』が公開中です。SXSW FILM（サウス・バイ・サウス・ウエスト映画祭）のドキュメンタリー・スポットライト部門に正式出品。ワールドプレミア上映され、観客・プレスの満足度の高い作品として、大きな話題を呼びました。

BOOK

島津冬樹さん初のエッセイ『段ボールはたからもの 偶然のアップサイクル』（柏書房）が2018年12月に発売!

©2018 pictures dept. All Rights Reserved

STORY

段ボールに恋した男、島津冬樹。彼はある日、市場の片隅で見つけた徳之島産ジャガイモの段ボールに心惹かれ、その源流を辿る旅に出る。かわいいポテトのキャラクターや商品ロゴのデザイン、流通など、この段ボールと関わるさまざまな人々との出会いと心温まる物語を、やさしく自然体で描く。

DATE

『旅するダンボール』
（2018年・日本／配給・宣伝：ピクチャーズデプト）
全国公開中
公式サイト： http://carton-movie.com

段ボールに新たな価値を吹き込む島津冬樹さんの「段ボール財布」

商品を保護し、輸送や保管のために使用する段ボール。外部の衝撃から中身を守るだけでなく、細かい商品をひとつにまとめるのに便利で、積み重ねやすいのでスペースの有効活用にも役立つ、生活に密接したものです。島津冬樹さんは、そんな段ボールをこよなく愛する、一風変わったアーティスト。世界中の街角に捨てられた段ボールを拾い集め、そのデザイン的な特徴を生かした「財布」に再生する活動を続けています。役目を終えて不要になった誰も見向きもしない段ボールであっても、ひと手間加えることで価値のある「たからもの」になる。廃棄物を再資源化する「リサイクル」でも、そのまま再使用する「リユース」でもない、「アップサイクル」の考え方を体現する島津さんの活動は数多くのメディアに取り上げられ、日本のみならず世界が注目する存在になりました。また今冬には、これまでの活動の集大成ともいえるドキュメンタリー映画が公開。「どんなものでも、愛すべきものになる可能性がある」ことを、島津さんの旅を通して描く温かい物語に、世界中から称賛の声が上がっています。

島津 冬樹 さん

しまづふゆき○1987年、神奈川県生まれ。2012年多摩美術大学情報デザイン学科卒業。2015年、広告代理店勤務を経てアーテイストとして創作を開始。放置されている段ボールを使って世界に1点しかない財布をつくる「Carton」の活動を通して、アップサイクルを提唱し続ける。世界30カ国を旅しながら段ボールを収集するとともに、国内外での展示やワークショップも多数開催している。
HP: http://carton-f.com

©2018 pictures dept. All Rights Reserved

――「段ボール」に着目するようになったきっかけ、理由はなんですか?

大学2年の時、ボロボロになった財布を買い替えるお金がなく、課題で余ったおしゃれな段ボールを使って、間に合わせの財布をつくったのがはじまりでした。おしゃれな段ボールが捨てられてしまうことに「もったいなさ」を感じていたので、財布にして身につけることはとてもいい解決だと思っていました。その時、財布がボロボロになっていなかったら、違ったものをつくっていたかもしれません。

――財布にする段ボールを選ぶ際のポイントは?

一番に、財布にしたときにかっこいい、かわいいか。段ボールを見た瞬間に、「どこを切り取るか」をなんとなく頭で組み立てています。

――海外にまで足を伸ばして段ボールを集めているそうですが?

これまでに訪れた国は30カ国ほど。1カ国につき、短いと2、3日、長いと10日間ほど滞在しますが、現地に着いたらスーパーの裏やマーケットに直行、日本から自転車を持ち込むこともあるので、自分のペースで段ボールを探しています。段ボールのデザインは、梱包される食品と密接な関係にあって、その国の言語や文化によって変化します。たとえば、アラブ圏ではお酒の段ボールは落ちていませんし、モノの流通が盛んなヨーロッパ圏では、どの国の商品かがひと目でわかるように国旗をモチーフにしたデザインが多い。最近行った国では、南アフリカが特に印象的でした。原色や蛍光色など奇抜な色使いや民族的な幾何学模様など主張の強い段ボールが多く、アフリカらしいパワーが表現されていました。今後は、コーカサス3カ国や南アメリカ大陸にも行ってみたいと思っています。また、ツバルなどの孤島にはどのような経路で段ボールが届くのか、とても興味深いですね。

――国や地域によって作品に対する評価に違いはありますか?

意外にも、どの国も同じ反応です。ゴミだと思っていた段ボールが財布になる。既成概念が崩れたときの驚きは、世界共通なのかもしれません。

――国立新美術館での作品展示や各地でのワークショップも積極的に開催されてますが、それらの活動にはどのような意図がありますか?

大切にしているのは、段ボールの可能性を知ってもらうこと。展示では、財布などの作品だけでなく、会場のレイアウト設計や什器を考えるところから、段ボールと異素材を組み合わせたテーブルや椅子づくりまで行っています。段ボールを使ってその空間をどう演出できるかを考えています。

――ワークショップに参加した方々の反応は?

ワークショップでは、どれを使うのか、選ぶ段階からみなさんの段ボールを見る目が変わり、目を輝かせてくれます。さらにボタンを付けて財布になった瞬間、誰もが笑顔になる。ワークショップを通して「段ボールはゴミだ」という概念がダイレクトに変わりますし、段ボールのみならず不要だと思っていたものが価値のあるものに変わる可能性があることを知ってほしいと思っています。

――今後の活動の展望・抱負を教えてください。

この「不要なものから大切なものへ」という考え方が、もっと世界中に広がっていけばいいなと思います。特に発展途上国など、ゴミ問題などを抱える国にとっては、ヒントになるかもしれません。また世界中の段ボールを展示できる「段ボールミュージアム」も構想のひとつ。世界中から集めた段ボールやそこで得た知見を自分のなかだけにストックするのではなく、より多くの人に知ってもらえたらうれしいですね。

――島津さんの作品に興味を持った方へメッセージをお願いします。

段ボールという素材を追求し続けたことが、9年の歳月を経て評価を受けることになりました。映画化や本の出版など、それらはすべて自分の好きなことを続けてきたからこそ得られたものだと思っています。いろいろな理由で好きなことから遠ざかっている人もいるかと思いますが、細々でもいいから続けることが重要です。追求し続ける先に、きっと成果が待っていますから。

「手紙」は語る

人間は表現する動物だというが、
手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。
手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

植村鞆音

第十六回　木村毅（きむらき）

わたしが名のある人と会った最初は池島信平さんだと以前書いたが、その次は木村毅さんだった。といっても、いまの時代、池島さんを知る人も木村さんを知る人ももうほとんどいない。

木村さんは文学評論家であり、明治文化の研究者であり、小説家であり、大学の講師でもあった。年譜を繰ってみると、明治二十七年生れで昭和五十四年、八十五歳で亡くなっている。著書に『島原美少年録』、『クーデンホーフ光子伝』、『ホセ・リサールと日本』など多数がある。

木村さんは小説家だった伯父直木三十五の友人であり、大学教授だった父清二の学兄でもあった。大学では直木の同級生で、「春秋社」という出版社である時期いっしょに働いたこともあるらしい。直木の得意技に業界人をネタにした辛辣な「ゴシップ記事」があるが、そのひとつ「私の友人名簿」(「モダン日本」連載)に、木村さんのことが出ている。

がむしやら、どいつたら、こんな男の事だらう。大きな声で、下らぬ事を喋つて、僕ら無言の者は、軽蔑してゐたが、学校を出てしまつて、暫くすると、翻訳をしたり、その内に『島原美少年録』と云ふ愚にもつかぬ小説をかくかと思ふと、フエビアン協会へ入つたり、ラグーザお玉なんて随筆を、小説体にかいて「日々新聞」を困らせたり、学校時代の、押しの強さが、だんだん強くなるやうである。小説にもならん物をかいても、押しさへ強ければ商売になるといふ好例を示してくれてゐる点に於て、存在価値がある。

直木との関係がどれほどのものだったのかは不明だが、木村さんは、学究の徒である弟清二の才能を高く評価して、晩年、『丸善百年史』の執筆陣に誘ってくださったりしている。直木の死後もわが家とのつき合いは長い間続いた。

わたしが、木村さんの名前を知ったのは新潟で高等学校に通っていたころのこと。当時木村さんは「新潟日報」に「夕閑帖」という随筆を連載されていた。友人のひとりが、木村毅はおならで「君が代」が吹けるそうだと教えてくれたが、さすがに本人には聞きそびれた。母校早稲田大学の講師もされていたので、早稲田入学が決まった後、わたしは姉に連れられ東京桜台のお宅に挨拶に伺った。桜台の商店街の通りがまだ舗装されない砂利道で、お宅の斜め前には目印の火の見櫓があった。伺ったのが夕刻だったのだろう。美人の奥さま手作りの、薄味の出汁がたっぷりかかった関西風の天丼をご馳走になった。

大学を卒業することになって、こんどは就職のお願いをすることになった。昭和三十六年夏のことである。父から話を聞いた木村さんは新潟岩原のロッジで避暑中なので遊びに来いといわれる。そこで、親子で岩原まででかけた。大声で話す人に悪人はいないというが、木村さんは大声の持ち主だった。豪放磊落（ごうほうらいらく）の外観だったが、ひょっとすると、見かけによらず繊細だったのかもしれない。残された手紙を見てみると、文字はやや女性的である。わたし宛のものは、父の名代で出席した還暦祝いのパーティの礼状くらいしか見当たらない。少年雑誌の投稿で育ったという話を聞いたことがあるが、博覧強記だった。木村さんのお兄さんは木村さんよりさらに豪快な人だったらしい。青大将の噛みついた片足をそのまま持ちあげて、「毅。ほら蛇だ」といったという話を聞きながら木村夫妻と父とわたしは大声をあげて笑った。

木村氏より父の清二宛てに届いた手紙

木村さんは、これといった志望を持たないわたしを関係する映画会社と出版社に紹介状を書いてご自身で持ちこんでくださり、わたしは最初に試験のあった映画会社に就職してサラリーマン人生の第一歩を踏み出した。わたしは、その後一年あまりで映画会社を辞め、新しくできたテレビ局に勤めを変え、結婚し、退職したが、わたしの今日あるは、木村さんのお蔭だといっても過言ではない。結婚式には主賓として出席していただいた。なにかの縁だったなといまにして思うのは、父とわたしがほぼ半世紀前、木村さんのお宅のすぐ裏に引っ越し、木村家とわが家の関係がさらに深まったからである。深夜奥さまから電話があって、主治医がつかまらないので近所のお医者さんに往診を頼んでくれというので、手配したことがある。

まだ幼かった子どもを連れて近くの公園に行くと、杖を片手に散歩されている木村さんに出会うことがあった。陽を浴びながら同じベンチに座ると、半ズボンからはみだした長男の白い腿に触れながら、「おいしそうだね」とすこし嗄れた声で話しかける。長男はほんとうに食べられるのではないかと緊張しながら時間の過ぎるのを待っている。去年の雪いまいずこ。いまでも微笑ましくそんなことを思い出す。

著者略歴
植村鞆音（うえむらともね）　エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、(株)テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2005年『直木三十五伝』で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年『歴史の教師植村清二』で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に『夏の岬』『気骨の人 城山三郎』など。

木村毅（きむらき）

文学評論家／小説家
1894-1979

岡山県勝南郡勝間田村（現・勝田郡勝央町）出身、早稲田大学英文科卒。京都の隆文館、春秋社にて編集に従事したのち、明治文化研究会に参加。『明治文化全集』の編纂にも尽力する。『小説研究十六講』などの研究書をはじめ、小説『ラグーザお玉』（1931年）など、幅広い分野で多くのすぐれた著作を残した。1978年に菊池寛賞受賞。

紙の魅力を体感しに出かけよう
「ペーパーイベント・カレンダー」 訪ねる

~1/20(日) EXHIBITION

辰野登恵子 オン・ペーパーズ
A Retrospective 1969-2012

日本の抽象画を代表する辰野登恵子さんの画業を通観できる展覧会。豊潤な色彩の有機的造形を描く油彩作品と並行して制作されたリトグラフやドローイングなど、紙の仕事を中心に紹介。2014年に逝去した作家の40年あまりにわたる表現の軌跡を、存分に堪能できます。

辰野登恵子 WORK 77-D-10／1977年／シルクスクリーン・鉛筆、紙／個人蔵／©辰野剛、平出利恵子／撮影：岡野圭

辰野登恵子 Oct-20-95／1995年／パステル、紙 個人蔵／©辰野剛、平出利恵子／撮影：岡野圭

DATA
■会場：埼玉県立近代美術館（埼玉県さいたま市浦和区常盤9-30-1）
■観覧料：一般1,100円、大高生880円
■問い合わせ：埼玉県立近代美術館
■TEL：048-824-0111
■HP：www.pref.spec.ed.jp/momas

2/12(火)~15(金) EXHIBITION

第87回東京インターナショナル・ギフト・ショー春2019

40万人が来場する、パーソナルギフトと生活雑貨の国際見本市。専門性の高い8つのカテゴリーと45の出展フェアで構成され、「衣・食・住・遊」のさまざまな新製品が集結。業界の垣根を超えた商談が行われます。

DATA
■会場：東京ビッグサイト全館（東京都江東区有明3-11-1）
■入場料：無料（ただし事前登録が必要）
■問い合わせ：事務局
■TEL：03-3843-9851
■HP：www.giftshow.co.jp/tigs/87tigs

2/18(月)・19(火) EXHIBITION

KPP「ユポ®展示会」（当社主催）

生活のさまざまなシーンで利用されている合成紙「ユポ」。水に強い、破れにくい、油・薬品にも強いなど、その特性と可能性について、実際のサンプル展示とあわせてご紹介します。

DATA
■会場：国際紙パルプ商事本社 1Fエントランス（東京都中央区明石町6-24）
■料金：無料
■問い合わせ：国際紙パルプ商事 経営企画本部 経営企画部 IR・広報課
■TEL：03-3542-4169 ■HP：www.kppc.co.jp

1/30(水)~2/1(金) EXHIBITION

第2回 販促EXPO［春］（当社出展）

販促業界の企業が一堂に会する国内最大規模の展示商談会。プロモーション戦略に役立つ最新の販促商品・サービスが集結する本展覧会に、当社も出展いたします。［小間番号：10ホール 38-42］

DATA
■会場：幕張メッセ（千葉県千葉市美浜区中瀬2-1）
■入場料：無料（ただし招待券が必要）
■問い合わせ：事務局
■TEL：03-3349-8505
■HP：www.sp-world-spring.jp

2/25(月)・26(火) EXHIBITION

KPP中部支店展示会「パッケージの現在と未来」（当社主催）

個包装、中箱、外箱、紙袋など、パッケージ全般の現状と製造過程を中心に、新素材や新技術を取り入れた最新の商品を展示します。また、「防災」「環境」をテーマに、関連商品もご紹介します。

DATA
■会場：国際紙パルプ商事中部支店 大会議室・食堂ほか（愛知県名古屋市中区錦1-11-20）
■料金：無料
■問い合わせ：国際紙パルプ商事中部支店 印刷・直需営業部 産業用紙課
■TEL：052-201-6355 ■HP：www.kppc.co.jp

2/3(日) EVENT

晴明神社「節分星祭」

平安時代の陰陽師・安倍晴明公を祀る神社で斎行される祭事。参拝者は、「陰」から「陽」へ「気」が変わる一年の節目・節分の日に、人の形を模した「人形」と呼ばれる紙に息を吹きかけ、身についた穢れを祓います。

DATA
■会場：晴明神社（京都市上京区晴明町806）
■参拝料：無料（人形の炊き上げ・お祓いには初穂料が必要）
■問い合わせ：社務所
■TEL：075-441-6460
■HP：www.seimeijinja.jp

3/3(日) EVENT

松尾大社（まつのをたいしゃ）「ひなまつり」

701年に建立された歴史ある松尾神社で行われる、子の成長と幸福を祈願する恒例行事。人のかたちをした紙製の「形代」に穢れを移し、曲水の庭（水路）に流す「流しビナ」は、格別な風情を感じられます。

DATA
■会場：松尾大社（京都府西京区嵐山宮町3）
■料金：無料（ただし、神像館・松風苑三庭は、庭園拝観料が必要）
■問い合わせ：松尾大社
■TEL：075-871-5016
■HP：www.matsunoo.or.jp

※開館日・開館時間などは、各ホームページにてご確認ください。 ※イベント・展示は、諸事情により変更される場合があります。おでかけの際は、事前にホームページまたはお電話にてご確認ください。

RICE INK®
輸送マイレージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。

エコ・プレスバインダー
針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

国際紙パルプ商事株式会社
KOKUSAI PULP&PAPER CO.,LTD.
発行：経営企画本部 経営企画部 IR・広報課
〒104-0044 東京都中央区明石町6番24号
TEL（03）3542-4111（代）
URL http://www.kppc.co.jp/

「TSUNAGU」vol.38 使用紙：OKトップコートマットN（127.9g/㎡／王子製紙株式会社）マット紙としての充分な紙厚とダル調の優れた印刷再現性とを兼ね備えたA2マットコート紙です。

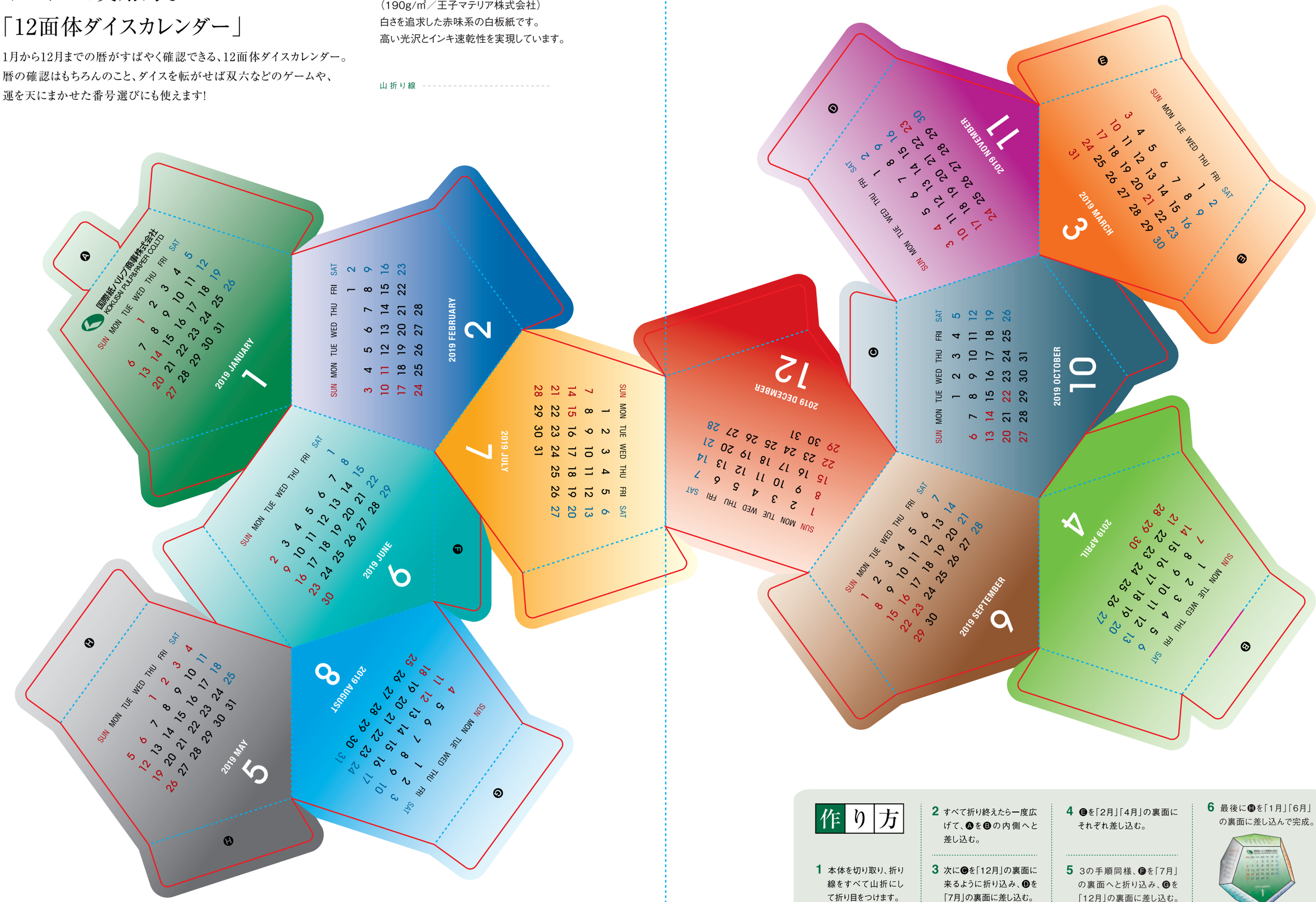
作る 紙と触れ合い、モノを作る
「PAPERCRAFT on the DESK」

オシャレで実用的な「12面体ダイスカレンダー」

1月から12月までの暦がすばやく確認できる、12面体ダイスカレンダー。
暦の確認はもちろんのこと、ダイスを転がせば双六などのゲームや、
運を天にまかせた番号選びにも使えます!

「作る」vol.38使用紙：OKプラウ
（190g/㎡／王子マテリア株式会社）
白さを追求した赤味系の白板紙です。
高い光沢とインキ速乾性を実現しています。

山折り線



作り方

1 本体を切り取り、折り線をすべて山折にして折り目をつけます。

2 すべて折り終えたら一度広げて、Ⓐを Ⓑの内側へと差し込む。

3 次にⒸを「12月」の裏面に来るように折り込み、Ⓓを「7月」の裏面に差し込む。

4 Ⓔを「2月」「4月」の裏面にそれぞれ差し込む。

5 3の手順同様、Ⓕを「7月」の裏面へと折り込み、Ⓖを「12月」の裏面に差し込む。

6 最後にⒽを「1月」「6月」の裏面に差し込んで完成。